

「自然に帰れ、農業・環境の復興は日本の復興につながる」

シンポジウムに 200 名参集 日本豊受自然農

「自然農で『食原病』を克服を
各講師それぞれの立場で提言」

農業生産法人日本豊受自然農(株)＝由井寅子代表取締役社長・静岡県田方郡函南町平井1741－6電話055（945）0210＝は3月20日午前10時から「日本の農業と環境シンポジウム」を京都・京都市サーチパーク サイエンスホールをメイン会場に札幌、東京、名古屋、福岡、沖縄の会場を同時中継で結んで開催した。各講師から農薬や化学肥料に頼っている農業から脱することが日本農業を再生に導くという趣旨の話が展開された。参加者も現状の農業の実態を知り、食に対する考え、健康な生活を送るために必要なことを改めて認識していた。

昨年の東日本大震災から1年経つものもなかなか復興に繋がらない、また福島県原発事故で多くの人々が故郷を離れ、危険区域外での生活に遭っている。そのような状況の中開催されたシンポジウムは参加者全員でまず国歌斉唱を行った。

そして主催者の農業生産法人日本豊受自然農(株)の由井寅子代表が挨拶に立ち、8年間の自然農の取り組みを紹介し、戦後の農薬、化学肥料などへ過度の依存が農地の荒廃だけでなく、多くの病気「食源病」を生み出している事実に触れ、今、目を覚まして、農薬や化学肥料を使わない自然農へ戻ることの必要性を訴えた。

この後、由井会長から大きな地球のバルーンを客席に投げ込み、環境や地球をもっと意識していこうというサプライズも用意され、参加者は歓声をあげながら、そのバルーンを運び飛ばす趣向で大喜びの一幕となった。さらに開会の陣太鼓を由井代表の手で打ち鳴らしてシンポジウムが始まった。

講演は①「宇宙の法則からみた農業の理論と実践」＝一般社団法人テネモス国際環境研究会理事長・飯島秀行氏②「耕作放棄地も人も劇的に蘇った。利他共生の農地再生運動」＝グリーンオーナー倶楽部主宰・大下伸悦氏③「自然農を推進することは日本復興につながる」＝NPO法人元氣農業開発機構常務理事兼幹事長・成瀬一夫氏④「人・動物・植物に自然治癒力を活かすホメオパシー」＝カレッジ・オブ・ホリスティック・ホメオパシー講師・菊田雄介氏⑤「自然農実践者の現場の声」＝農業生産法人日本豊受自然農(株)静岡県函南農場・工藤暢彦氏、北海道洞爺農場・米丸輝久氏⑥「地球からの贈り物・フラワーエッセンス」＝カレッジ・オブ・ホリスティック・ホメオパシー講師・東昭史氏⑦「薬草の豊富な御嶽の自然を守る」＝NPO法人自然科学研究所理事長・小谷宗司氏（長野県薬剤師会専務）⑧「自然農による酪農業の現状と今後の課題」＝JA函南東部代表理事組合長・片野敏和氏⑨「放射能問題の対策法としてのレメディの活用」＝日本豊受自然農代表・由井寅子氏の式次第で行われた。

講演後、各講師から一言ずつコメントを述べた後、ニュージーランドにおける自然農の取り組みの映像が流され、イギリスのバイオダイナミック農法実践者、マーク・ムーディー氏を招いての講演が英国から京都の会場に向かって生中継で行われ、最後に由井代表から「環境、人、植物、すべてを含めどうしたら日本を復興できるか、これからの課題。すべてを自然型に戻していくしかない。人間も犬も猫も、すべてを自然型に戻して、自分らしく生きていきましょう」という挨拶があり鳴り止まぬ拍手の中、第1回の日本の農業と環境シンポジウムは閉幕となった。

農業生産法人日本豊受自然農(株)の静岡県函南町と北海道洞爺で展開している自然農四季折々の取り組みの様々なシーンを映像で紹介されるなど盛沢山のシンポジウムだったが、参加者は真剣な眼差しで各講師の話聞き入っていた。

また会場入り口には自然農の農場で採れた作物等が販売され、参加者は休憩時間に買い求めていた。

昨年設立された農業生産法人日本豊受自然農(株)。本格的に日本農業再生のため、日本人の健康のために「食」というものを見直さなければ国家の医療費が増大していくことを明確に掲げ、スタートを切った今回のシンポジウムであった。（詳細は2面、3面、4面に掲載）。